

苦悩するマリオネットを前に——アベル・コエリョーの「十一面ハムレット」

F. アツミ (Art-Phil)

“To be or not to be: that is the question” —有名な、あまりにも有名な一節をめぐる変奏曲。そして、人間的な、あまりにも人間的な一節をめぐる悲劇、あるいは喜劇の反復。誰にとって？ 演者にとって。監督にとって？ 翻訳者にとって。作曲家にとって？ あるいは、鑑賞者にとって……。 「ハムレット」第3幕第1場の冒頭で提示される存在の命題をめぐる解釈論争は、翻訳の問題系を付帯して、擬古調の旋律と神秘的な和音からなるピアノ音楽によって演奏／上演される。

白いシャツとパンツに薄茶のベルトの男が物憂げに問いかける “To be or not to be: that is the question”。 「ハムレット」をそのまま上演したかのような主題を提示した後、本作における解釈上の論争は主に日本語訳の変奏をともなって展開される。「存在するか、存在しないか。それが問題だ」「生きるか、死ぬか、それが問題だ」「あるべきか、あらざるべきか。それが問題だ」、あるいは「いったいどうすれば？ 困った」とさえも意識可能な一節は、まるで十一面観音のカルマをめぐる遁走曲のように展開される。

アベル・コエリョーは語る。なめらかな英語で、そしてぎこちない日本語で。夢のなかのマリオネットのように。英語で語られる主題はあたかも城内の一室で国王の復讐を誓うハムレット王子の苦悩となって響く一方で、日本語の翻訳を介して語られる主題の変奏はまるで原文を訳出しようとする翻訳者の難渋、あるいはセリフを語る練習を繰り返す演者の煩悶のようにも聞こえてくる。あまりにも素朴な翻訳とともに変奏されたセリフは、場末で一人問答する労働者の嘆きのような滑稽ささえ思わせるだろう。

主題と変奏の行き交いは、藤家溪子のピアノが奏でる音楽劇のなかで、古典主義、ロマン主義、近代主義、新古典主義、そして実験主義などを経て、現代へと至る、「ハムレット」の上演史とも呼べるスペクタクル（見世物）へと発展していく。ステージ上の男は、顔を手で覆い、天を仰いで祈り、自らの服をかき切るといった悲劇的な身振りをするものの、どこか英雄的で、牧歌的で、機械的でさえある音楽の調べによって時に滑稽な喜劇へと脱臼されてしまうかもしれない。

上演のハイライトはおそらく、アベル・コエリョーの扮する男が藤家溪子の演奏するピアノの椅子に座り、ピアノを手で叩くシーンではないだろうか。ステージで上演されるどのような語りや身振りも、ピアノのどのような旋律や和音も、すべての上演は再演でしかないという苦悩、あるいは滑稽さに対する演者の一撃を見ることができた。「すべての上演が再演となってしまう」という上演をめぐる今日的な問題は、悲劇的であるがゆえに、喜劇的であるといえるのかもしれない。

本作では、非伝統的な現代の芸術ジャンルをつくること、ダンス的な生きた建築、音楽とダンスの対位的関係といった方向性を模索することを試みているという。それはどのような悲劇、あるいは喜劇なのだろうか？ “To die is to sleep (死ぬことは眠ること)” という第2主題を引けば、反復される創作、上演、解釈をめぐる問いは、不気味な微睡みのように憑きまとうことになるだろう。 — “To be or not to be: that is the question”。